

## はじめに

あなたは異星人で、数十年後の地球にやってきたとしよう。やや古い宇宙旅行のガイドブックの指示どおりに、思いがけずお世話になった地球人にお金を渡そうとする。

「お金はいくら……？」

「お金はいらないよ。間に合ってるからね。この星じゃみんなそうだよ。人類の祖先たちが遺してくれた元手を使って世界中で殖やしているからね。そうやって殖やしたのから毎月お金が入ってくるようになってる。」

「ほう!？」

「大した金額が入るわけじゃないから、お金が欲しい人は働いてるよ。旅行とか、コレクションとか、うんとお金がいるからね。でも食べていくには十分だから、みんな好きなことやってる。」

「好きなこと？」

「いくら時間があっても足りないほど没頭して、道を究めたい人たちがいるでしょ？ダンス、演劇、音楽、アート、スポーツ、学問研究など。でも、そういうのじゃなくって、仕事が好き、っていう人もいるね。政治、行政、法曹、経営、ものづくり、保健医療・保育・教育・介護、メディア、運輸交通のお仕事とかね。商売が大好き、純粋なお金儲け、投資が好きっていう人も。」

「仕事だったらその分お金がもらえるわけね？」

「みんながやりたがらない仕事ほど報酬は高いよ。やりたがる仕事は、ほとんど無償ボランティア。でも、人類の祖先たちの元手からお金が入るから、質素に暮らして、好きなことは続けられる。」

「ふーん、祖先たちからの元手ね!？」

「人類の祖先たちは、ずいぶん昔は国どうしで武器を取って争い、少し前までは会社どうしで争い、とうとう世界中の富、というより世界中の富を創り出す原材料や設備や技術のほとんどがほんの数百家のものになった。その数百家の大株主は数十社で、さらにその数十社の大株主は数百名だった。ビリオネアと呼ばれ、一人で少なくとも10億米ドル(約1,000億円)以上の金融資産を持つ大株主たちは、資産運用会社にそれを預けて、少なくとも毎年その1割の1億米ドル(100億円)以上のお金を受け取っていた。元とは言えば、そんな元手は、人類の祖先たちが人類の子孫みんなに残してく

れたはずのものだったのだけど、今はビリオネアたちのもの。時の流れだから、しかたないさ。……そう思われていた時代もあったんだ。」

「じゃあ、今は違うの？」

「時の流れだからね。ビリオネアたちは、ほとんど全世界の財産を相続するのに、どうして私たちは人類の祖先たちのものだった財産を相続できないの？ そんな世論が高まって、ビリオネアたちも、多勢に無勢、ついに抵抗できなくなった。まあ、元をたどれば地球資源はみんなのものだったからね。人類の祖先たちがそれぞれ働いて作ったものや編みだした技術が戦争のどさくさで奪われ、転々と売買されて、最後にビリオネアの手に入ったっていうのも間違いないし。……そしてとうとう、新しい国際法ができた。地球規模で動く大企業の株式の過半数は、人類遺産ホールディングスという新しい会社が所有すること、っていう条約がね。」

「人類遺産ホールディングス？」

「人類遺産持株会社とも言ってね。株を持つことで、その会社の経営をチェックしながら配当金を受け取る会社なんだ。過半数株を持つということは、一株一票の株主総会で過半数の票を取れるってこと。取締役会の人事も含めて、その会社を完全にコントロールできるってことだから、責任重大だよ。世界中の多国籍企業を親会社として完全支配する大株主だからね。末端の孫会社、ひ孫会社からみたら、本当に祖先みたいなもんだね。」

「じゃあその人類遺産ホールディングスの株主は誰？」

「地球上の人類全員だよ。人類遺産だからね。おぎゃあと生まれたとたん、一人一株を相続して、売ったり買ったり、あげたりもらったりもできなくて、死んだらおしまい。株主総会の投票権は判断力のある成人になってから一人一票だよ。」

「地球人って、成人だけでも数十億人くらいはいなかったかしら？」

「そのとおり。毎年の株主総会は、オンラインの大イベントだよ。自分たちの後の世代にも、このすてきな地球と祖先からの財産を元手に残して、子孫たちにも祖先からのお金が入って、好きなことのできる生活をさせてあげたいからね。多国籍企業をコントロールする基準、配当金収入のベーシック・インカムとしての配分のしかた、とにかくちゃんとした政策を持つって取締役を選ぶために、みんなずいぶん勉強するよ。いろいろ失敗もあったけど、みんなずいぶん賢くなってきたね。」

近未来の仮想物語はこのくらいにしよう。この話は、この本のタイトルにある「グローバル・ベーシック・インカム構想」をイメージしていただくために、筆者が創作したものだ。

大学生だったときのこと。筆者は、ああおもしろかった、と言って死にたいと思った。そのためには世界から飢餓と貧困と戦争をなくしたいと決意した。

学問研究の世界に取り組んだ。すでに40年が過ぎた。本書はその成果、学生たちにそのうち出すよと約束してきた「元気の出る本」の第一弾である。

グローバル・ベーシック・インカム構想の詳細は本書では描かれていない。しかし、グローバル・ベーシック・インカム構想の要点と大まかなスケッチだけでも、あるとないとではずいぶん違う。本書では、そのことを力説したつもりだ。

21世紀に入ってすでに20年が過ぎた。国連総会が各国首脳の満場一致で、飢餓と貧困を撲滅し、人類の平和と地球を守る、そのために世界の仕組みをすっかり変えてしまうと宣言して5年たった。新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい始めてほぼ1年になる。

21世紀の人類をバラ色に描いてきた主流派開発学を批判し、20世紀の後半以降の人類の歩みが地球生態系を壊し、飢餓と貧困と戦争で人類の半分を苦しめる道だと警鐘を鳴らし続け、異端と見られてきた批判開発学は、いまや主流派になった。21世紀は、テロと内戦、飢餓と貧困、気象災害と新しい感染症、あらゆる苦難の犠牲者の血に染まっている。そんな現実を前に、2015年、とうとう国連と各国首脳は20世紀の主流派開発学に背を向け、地球人と地球防衛のための宣戦布告というべき『アジェンダ 2030』を採択し、総力戦体制として持続可能な開発目標 (SDGs) 推進体制を築き上げた。だが、新しい主流派となった批判開発学には、未来へのビジョンがあるだろうか？ 本書はこの問いを投げかける。

グローバル・ベーシック・インカム構想のスケッチが描けるようになったいま、筆者はようやくその問いを掲げて、最後まで批判開発学の先達たちと向かい合うことができたと思う。読者諸氏が、本書を読まれて、思わぬ間違い、足らざるところを厳しく指摘し、筆者のしかばねを乗り越え、人類の未来を描く仕事に参加していただければうれしい。筆者は、読者諸氏のことばを吟味し、さらに命の続く限り、この方向で、第二弾、第三弾と、「元気の出る本」を出し続けていくつもりでいる。